

新春対談



新年 あけましておめでとう
ございます。

昨年、本市では「江・浅井三姉妹博覧会」を324日間にわたり開催してきました。結果、「江のふるさと」長浜が全国的に脚光を浴びて、多くの人にお越しいただき、博覧会メイン3会場の入館者は、118万人を超えました。

さて、今年の新春対談は、大河ドラマ「江〜姫たちの戦国〜」の音楽を手掛けられた吉俣良さんです。心に染みわたるすばらしい曲を生みだされる吉俣さん。黒壁美術館での対談では、長浜市の印象や、作曲時のエピソード、そして夢のかなえ方などを音楽家の視点からお話いただきました。

ようこそ長浜へ

市長：ようこそ長浜市へお越しくださいました。本市は、人口およそ12万5千人で県内3番目の人口規模です。面積はおよそ680平方キロメートルで、数字を聞いてもなかなか想像できませんが、滋賀県の6分の1を占める琵琶湖とほぼ同じ大きさです。

吉俣：琵琶湖と同じですか。琵琶湖が滋賀県の6分の1しかないことも驚きですが、長浜市がそんなに大きいとは…。長浜市と琵琶湖で滋賀県の3分の1ですか。すごいですね。

市長：はい。この話をすると皆さんそうおっしゃいます。

吉俣：僕は、大河ドラマが縁で長浜を知りました。作曲のために初めて訪れた際、黒壁の雰囲気が入りに入り、絶対ここで曲を書こうと思いました。

市長：ありがとうございます。何度かお越しいただいているんですか？

吉俣：もう4回ほど来ていますが、泊まっているホテルから雄大な琵琶湖が一望でき、一息つきたい時には、黒壁があります。

ろうとの思いが強いまちです。

今では想像もできませんが、吉俣さんが気に入ってくださった黒壁スクエア付近は、昭和の終わり頃、土日でもお客さんがほとんどいない閑散とした通りでした。その状況をガラスによるまちづくりで打破し、年間200万人が訪れるまでに再生させたのは、地域の人たちの力です。今回の博覧会の成功もそういった「長浜市民力」の結果によるものですね。地域ぐるみで全国からお越しいただいた皆さんをおもてなしました。これからもこの長浜市民力でまちを盛り上げていきたいと思っています。

吉俣：そうですね、平成22年の4月頃に長浜を訪れた時、大河ドラマの放送も始まっていないのに、街のいたるところに「江〜

僕にとって、黒壁スクエアは癒しの空間です。豊かな自然と田舎の香りを残しつつ、それでいて都会的などころもある。曲を書くにはベストの環境です。

市長：ご出身は鹿児島県ですね。鹿児島と比べてどうでしょう？

吉俣：実は面白いことに、長浜から見る琵琶湖の景色は、僕の好きな鹿児島湾の景色に似ているんですよ。鹿児島に行く時に僕が泊まるホテルは、湾の近くに建っています。そこから見える景色は、長浜のホテルから見える景色と変わらないんです。目の前には水が広がり、夜になるとその奥に街の光が見える。そんな幻想的な景色がとても気に入っています。

そして今年へ

に關係するのほり旗が立っていました。きつとそういった市民が一丸となった取り組み姿勢が功を奏したんですね。

市長：今長浜では、この博覧会



▲戦国大河のふるさと創造を宣言しました

長浜の市民力

市長：そう言っていただけだと嬉しいですね。景色の美しさもさることながら、長浜は歴史のまちでもあります。戦国時代は、「近江を制する者は天下を制す」と言われるほどの要所でした。

吉俣：戦国時代を語る時、北近江は外せないと思います。ここを触れずに戦国は語れないといっても過言ではないですね。

市長：私もそう思います。そんな長浜ですから、今回の大河ドラマにも、浅井長政やお市の方、浅井三姉妹ゆかりの地として描かれました。

そして、この大河ドラマの放映に併せて開催したのが、江・浅井三姉妹博覧会です。総勢4

で得た財産・長浜市民力を次につなげ、さらなる地域の活性化を行いたいと考えています。先ほど申し上げたように、長浜が戦国の舞台であったことは間違いありません。そこで、次は長浜戦国大河ふるさと博の開催を考えています。

吉俣：もう次の博覧会を考えているんですね。すごいですね。

市長：今度は、長浜市にある文化財、例えば賤ヶ岳の合戦場や神祕の島・竹生島などを見ていただけるよう考えています。また会場以外にも、高月地域の国宝十一面観音など、好奇心をくすぐる本物のお宝で皆さんをお出迎えします。

吉俣：僕の好きな竹生島も見られるんですね。必ず、見に来ます。



作曲家 吉俣 良さん

昭和34年9月生まれ

数多くのテレビドラマの作品を手がけ、サントラ界での地位を確立させる。2008年の大河ドラマ「篤姫」の音楽を手掛け、大河ドラマの大ヒットにつなげる。

2011年の大河ドラマ「江〜姫たちの戦国〜」でも音楽を担当。

